

ひまわり

葵日向の上の丘

山田太一



新潮文庫

おか　うえ　ひまわり
丘の上の向日葵

新潮文庫

や-28-7



平成四年二月二十五日 発行

著　者　山　田　太　一
やま　だ　たい　いち

発行者　佐　藤　亮　一
さ　とう　りやう　いち

発行所　株式　新　潮　社
かぶし　き　しん　しやう　しゃ

郵便番号　一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話　業務部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替　東京四　一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

© Taichi Yamada 1989　Printed in Japan

新 潮 文 庫

丘の上の向日葵

山 田 太 一 著



新 潮 社 版

4821

目次

第一章	よろめく女	一・七
第二章	丘の家	一・二六
第三章	メランコリア	一・三九
第四章	告白	一・五二
第五章	葉桜の夢	一・七〇
第六章	肇の世界	一・八七
第七章	二つの家で	一・一〇六
第八章	波紋	一・一三三
第九章	夜若葉	一・一三六
第十章	秘密の味	一・一五〇

第十一章	グループ	一六七
第十二章	羊の揉め事	一八四
第十三章	妻との対話	一九五
第十四章	計画	二二三
第十五章	二人が来るまで	二三六
第十六章	その午後	二三七
第十七章	雨の夜に	二五三
第十八章	ホテル	二六五
第十九章	戻って来た日	二七四
第二十章	向日葵 ひまわり の家	二八九
第二十一章	秋	三三三

丘の上の向日葵

第一章 よろめく女

この物語の発端から丁度一週間前、ゆずはらこうへい柚原孝平は勤め帰りの南武線府中本町のホームで、同じ研究所の高山里美とたまたま一緒にになり、こんな話を聞いた。

第二次大戦中のドイツ軍捕虜収容所でのことである。フランス人の捕虜たちの間に、こんなことがあったという。

（この話は、ロマン・ギャリの本からコリン・ウィルソンが要約したものをハワード・F・ドッサーが引用した文章の中にあり、その翻訳を里美が読んだのであったが、孝平はそんな経緯は知らない。ただ、おおまかにいって二つの感想を持った。それは、あとで述べる）

収容所の中で、フランス人たちは士氣沮喪そそうしていた。

するとある捕虜がゲームをやろう、といい出したのである。

ゲームは、収容所の自分たちの棟に女の子がひとりいると想像しよう、というものであった。それぞれが、心を集中し能力をふりしぼって自分にとってもっとも魅力のある女の子を想像する。そして、その子が小屋の隅すみのベッドにいると思ひ込むのである。

服を脱ぐ時には、毛布をつい立て代わりにして女の子に見られないようにする。汚い言葉

を使った時には、その子の方を向いてあやまらなければならない。

どうせ時間はいくらでもあった。みんなその気になり、目を閉じて、とびきりの女の子を思い浮かべようとした。まずはピンクの肌はだを。次は輝くばかりの美しい髪を――。

女の子は息づきはじめた。いまにも見えて来そうに、娘はその棟で暮らしはじめた。その棟の男たちは元気が出て来た。

ドイツ軍は、その棟だけの活気に疑問と不安を抱いた。そして、たちまちゲームのことをつきとめ、司令官は悩み、遂に部下をひき連れてその小屋へのり込み、女の子のひき渡しを命令したのである。そんな娘は、ドイツ軍相手の売春宿に、ほろり込んでやる、と。

捕虜たちは、抵抗した。

とびきりの娘をおめおめ連れ去られて、二番手の女の子と生きるのは、みじめなことだった。娘を守れなければ、男ではなかった。

捕虜たちの頑強な抵抗に、司令官は自分の敗北を知った。主謀者の捕虜を独房にたたきこみ、忘れることにした。

独房でゲームの発案者は、新しいゲームにとり組んだ。果てしない草原を思い浮かべ、象の大群と一緒に走り回り、長い監禁の間、正気を保ったのだった。

孝平は里美がそんな話をしたことには好感を抱いた。同じ洗剤メーカーの研究所だが研究室のちがう四十五歳の孝平と二人になり、二十五、六の里美はたぶん話題に困ったのである。

しかし、普通の娘はそんな話はしないだろう。

電車の中で孝平は、話を続ける里美の横顔をさり気なく何度も見た。こんな綺麗きれいな子だったか、と思った。少なくとも入社して二年はたっている。これまで何度か口をきいているし、商品テスト室へ行く度に、見かけていたはずである。どうして今まで魅力に気がつかなかったのだろう。不思議なような気がした。ひそかに嬉うれしくもあった。このところ研究所には、人の目を楽しませるような女性はいない、と思っていたのである。

里美の捕虜収容所の話が終わると、

「面白い」

と孝平はさっぱりとした笑顔をつくった。実のところ、やや複雑な感慨があったのだが、若い女にはかげりは見せない方がいい、単純に面白がる方が好かれる、という気が働いた。「よかった」と里美は膝ひざに置いたやや大きめのハンドバッグを両手で軽く叩たたいた。「私だけ面白がってるのかなって、少し不安だったけど」

「そんなことはない」

「昨日読んで、誰かに話したかったです。すいません」

「いい話だった。ぼくの研究室では、そんな話題は出ようもない」

「じゃあ」

急に里美が立ち上がった。

電車が矢野口のホームにすべり込むところだった。寸前まで立ち上がる気配がなかったの

で、不意につきはなされたような気持ちになった。

「ここなの？」

「いえ。今日はちょっと人に逢^あうんです」

さよなら、と明るく一礼してたちまち里美はホームにおりて行く。

「さよなら」

孝平は学生のような声を出した。ドアが閉まる。電車が動き出す。ホームを歩く里美に軽く手をあげた。里美も手を振る。

はしゃぐような気持ちがあり、それをあさましいとも思った。またはじまるか、と自嘲^{じちよう}する気持ちもあった。

フランス人の捕虜たちではないが、いつの頃^{ころ}からか、孝平には空想にふけるところがあった。研究所に、若い娘が入って来る。気に入ってしまう。すると、帰りの電車で、その娘との関係を、半ば意識的に空想するのである。

以前、新聞記者の本で、こんな体験を読んだことがある。取材で砂漠^{さばく}を走っているうちに車が故障してしまった。カメラマンと二人である。見渡すかぎり砂ばかりだ。とにかく、いつか通るであろう他の車を待つしかない。陽^ひは次第に傾いて行く。風が冷たくなって来る。心細い。その時、あることないこと性的な話ばかりをし続けたというのである。性的な話が、いちばん現実を忘れさせたという。

孝平の空想には、ちよつとそういうところがあった。

だから里美が捕虜たちの空想ゲームの話をはじめた時、孝平は内心小さく狼狽した。彼の空想癖を知っていて、あてこすりをいわれたような気がしたのである。しかし、誰も知るわけがなかった。

空想癖がついたのは、三十代の半ばあたりからである。仕事を頭から追いつきたい時、意図的に誰かとの情事を空想した。小一時間かかる夜の電車で、仕事の圧迫感から逃れたくて、相当本気になって、すぎるように、その時魅かれていた娘との情事を思い描いたこともあった。別の時には、緊張もなく癖のように、疲れた頭で、女のワンピースの背中のフアスナーをゆっくりおろしてみることがあった。

しかし、それが現実になったことは一度もない。空想はいつまでも空想のまま、大抵は対象にしている娘の結婚や退職で終わりをつけた。孝平は行為では一度も妻を裏切ったことはない。

里美と別れてからの電車で、孝平は目を閉じて彼女との進展を夢想した。ひどい人生だという気持ちもないではない。夢想するだけではなく、現実に進展させなくてどうする？ という人並みの考えも横切らないではなかったが、ほぼ二十歳はなれている里美と先へ進んで、妻にかくし人目を避け、若い女の熱気をもて余したりするのは、ごめんだとも思った。

しかし、翌日の午後になって孝平は口実をつくって、里美のいる商品テスト室へおりて行った。

孝平は主任研究員である。課長待遇で三階の研究室に六人の部下がいた。

他に四つの研究室があり五つの部門で開発を競い合う仕組みになっている。第二洗濯洗剤が孝平の担当である。

「水量あれが限度だって？」

廊下から主任の松川良子が見えたので、声をかけながらテスト室へ入った。

「ええ」

何列にも並んでいるテスト用の洗濯機の一台中からシーツのようなものをひき上げながら肥満体の松川は不満そうな声を出した。「どうしてもあれ以上のデータは出なくて」

「やっぱりフロックか」

いかに少ない水で洗濯を可能にするか、というのが開発計画の一つの柱であった。

何気なく部屋を見渡すと、三人ほどの男女がいて、それから窓際の流しの前の里美を見つけた。

するとまるで視線に合わせたように、後ろ姿の里美が振りかえった。

「こんにちは」

明るい微笑だった。髪が濡れていた。

「テスト？」

分かりきったことを聞いていた。勤務中に私用で髪を洗うわけがない。

「はい」

大きな白い襟のような丸い防水布をつけて、里美はさっぱりしたお辞儀をすると、また後

ろ姿になった。動くたびに水滴が光った。

すぐ目をそらしたが、孝平は感嘆していた。美しかった。

研究室の年間計画は過密である。孝平のところだけでも一年に三十件から四十件の特許を出願できる開発が要求されていた。研究所全体の目標は年間ほぼ三百件である。どの研究室が特許成立のさいに会社から出る登録褒賞金ほうしょうきんを一番多く手にするかは、孝平の活力を大半使ったすレースだった。

その上なになが出来るというのか？ 家庭の平穩を維持し、病氣にならないように気をつける。それだけで精一杯だった。誰がなにをするなといっているわけではないが、事実上はほとんど行動を封じられていた。

となれば、多少の夢想は仕方がない。一体誰がなんの夢想もせずに現実だけで生きているというのだろうか？

数日、時折孝平は里美との関係を夢想して甘い気分になった。しかし、その夢想は簡単にこわれてしまふ。その夜がこの物語の発端となった。

その夜、副主任の小野寺と十時すぎまで孝平は残業をした。

灯あかりを消す前に、進行中の実験の確認をしていると、小野寺が「高山君に気がついてますか？」というのである。

急に里美の名前が出たので、「高山君——？」とすぐには顔が浮かばないという口調にな

った。

「商品テスト室の高山里美です」

「どうかしたの？」

「気がつきませんか？」

「なにを？」

「急に綺麗になったんです。明日、気をつけて見て下さい。これが高山君かって思いますよ」

「整形でもしたの？」

「結婚だそうです。去年の秋、バリ島へ行って、帰りの飛行機で相手の男と隣り合わせたつていうんです。大きなスポーツ用具店の次男坊で、五月に退職して式だそうです。女はやっぱりすごいねえ、恋愛するとあんなに変わるんですねえって、柴田しばたや蓮谷はすやなんか溜め息をついてます」

「そう」

そうなのか。里美の輝きは、そういうことなのか。

小野寺はドアをあけ、廊下に出て待っていた。

「目立たない子だったけど、そんなに綺麗になったの？」

「気がつかないの、いけないんじゃないかなあ」

「もっと年増としまさに目が行くんだ」

「誰ですか？」

「研究所に在るわけないだろ」

「そこなんですよねえ。やっと綺麗になつた高山君が嫁に行つちやうんじゃ、働く喜びなんかないじゃないですか」

小野寺は、門の脇の守衛室に鍵を置きに走つた。小野寺も堅い男だつた。研究所の男たちは大抵色事には不器用で「愛妻家」が多い。仮に里美が結婚しなくなつて、妻帯者の誰かが彼女と出来てしまふなどということは、あまりありそうもなかつた。それでも里美が「嫁に行つちやう」と「働く喜び」がなくなるなどといつてゐる。小野寺も里美との架空の情事を夢想してゐたわけだ。「俺が特別變つてゐるわけではない」

小野寺は京王線なので、五分ほど歩いたところで別れることになる。

十時半近い南武線はすいてゐた。

ひとりになると、次第に失望が身体中に行きわたり、力がぬけて行くような感じがあつた。

「そうですか」とだるいような頭でくりかえした。「結婚をしてしまふのですか」

南武線を溝の口で降り、私鉄の田園都市線に乗り替へるには、一度町へ出なければならぬ。百メートルほどだが、アーケードの商店街を歩くのである。

それから田園都市線の下りホームに上る。待つ人はまばらだつた。

電車が来るまで七分ほどあつた。少し寒い。

気がついて、ホームを前方に歩いた。降りる駅の階段の位置に合わせて線路に向かつて立